

真のチャンピオン 安田憲正。(2013、11、5～11、27)

「ちょっと、安永一緒に歌うぞ。はよ、こいまっ。」この言葉を言うのが先か、自分がマイクを手にするのが先か……。曲名はもちろんアリスの「チャンピオン」である。いつも先生は最後でわざと？音程をはずすものだから、私は必死で外れないようにと、曲に食らいついて歌った。

安田憲正先生が今年9月21日の午後この世を去った。くしくもこの日は今年度の日本チャンピオンを決めるという大会、日本選手権水泳競技大会が東京辰巳で開かれていた。今まで数多くの日本チャンピオンを輩出し、自身も2度のオリンピックコーチとして活躍されていた。われわれ若手のコーチを育てていただいたと感謝の念に堪えない。私と安田先生と会話を交えたのは、筑波で行われたジュニア強化合宿であったと記憶している。それまでは「えらく恐ろしいコーチだ。」「何考えているのか、わからんコーチだ。」という表現では間違いなくマッチしている。

1947年、5月12日生まれ。66歳であった。

ジュニア合宿の夜、コーチミーティングがありそこで会話をしたことを覚えている。「安永、5人チャンピオンを作ったら認めてやるよ。」今をときめく最先端の指導者たる人物がそういわれたのである。当時、私は安田千万樹をつれて、ジョイフルアスレチックに来ていた。私もようやく駆け出しのコーチだったので何かあればすぐに吸収するという姿勢での参加であった。安田先生は板ふみから入水からトレーニングまで何から何まで説明されていた。話を聞き逃さないようにしていると、それが冗談であったりしたことがあった。でも、最初は話を聞いても理解できないことが多かった。私は徐々に安田憲正という先輩に引き込まれていった。

サザンクロス

サザンクロス・サーキットといい、ニュージーランドとオーストラリアをサーキットで回る国際大会である。日本は1990年に初参加をしている。天理の平野コーチと当時日本チャンピオンの元淵幸（現、金戸幸）である。

私が始めてサザンクロス大会に参加したのは、1991年から1995年の5年間連続で参加させていただいた。誰を参加させるか。というコーチ会議のときに私は手を挙げた。参加したい意向を示したときだった。「安永、お前なぜ行くんだ。」と安田先生が言われた。

「見せにいくんです。」当時、109Cを宮本選手に習得させべく挑戦する毎日だった。他の種目もとりあえず世界に通用するものであった。私も宮本を世界基準で判断してほしいという気持ちで間髪いれずに見せに行くということを口走っていた。すると、安田先生は「あっ、そうか見せにいくんか。」とその言葉に納得感が漂ったことを覚えている。

2回目のサザンクロスであっただろうか、NZのロビン・フットさんのお宅でパーティがあった。その席で私は安田先生の紹介を「Japanese famous Devil Coach」と紹介した。安田先生とのサザンクロスはとても面白いエピソードでいっぱいである。お互いに片言の英語を駆使しての日本チームの売り込み、自分の立場などずいぶんとコミュニケーション能力がついたと思う。決して日本の国ではしゃべれない英語文法であった。それでも飛び込み関係者たちは理解してくれ、ゆっくりとわかりやすく語りかけてくれた。

名勝負

安田先生の名勝負というとたくさんあるだろうが、私と先生という関係からすれば私自身も忘れもしない名勝負があった。1992年（平成4年）宮崎インターハイでのことであった。当時、宮本基一郎選手が3年生でわが鳥取県立米子高等学校の2連覇がかかっていた。大会は台風の真っ只中、固定台の前方から吹く約25Mの強風はまさに身体が流される、もっていかれるという感じのそれであった。宮崎の飛び込み台は風が強いということは自分が国体を経験しているのでわかっていた。インターハイ前の地元での練習でも風の強い日を選んで高飛び込みの練習をした。しかし、米子では横からの風はあったが、前からという風はなかった。そういう面では初の経験である。しかも今までにない強風の中で……。宮本選手は気が気ではなかったであろう演技種目。当時日本でもめったに見られない高等種目のONパレードであったからだ。

ライバルは坂井選手（石川）であった。坂井選手はある程度簡単な種目を低い高さで飛ぶということに徹していた。特に高は板に比べればやや苦手といった感じである。

「先生、怖いです」と観客席で私の隣に座っていた宮本選手のお母さんは不安を隠せないようだった。この状況で私も不安でいっぱいだった。「負けるときは、こんなものですよ」……。結局、坂井選手が優勝してしまった。高飛びを売りにしていた宮本選手はプールサイドで泣き崩れていた。次の日は大会が中止になった。穏やかな1日を過ごせた。

まだ、負けたわけではない。私は宮本に言い聞かせた。板にかけた。板で坂井選手に勝てば総合優勝は米子高校にくる。ここから反撃ムード全開。予選で気負ったせいか105で台オーバーの大失敗。でもこの失敗こそ安田先生が私に教えてくれた教訓なのである。「安永、わざと105を失敗させたな。」「いいところに残っとるがいや。」と決勝のとび順のことで選手が一番飛びやすい場所。そこに残すということである。試合中、私は坂井選手の演技のみを注視し、坂井選手に勝つことだけに集中した。実は決勝の選手紹介のときに、これは勝ったかも・・・と思った。それは坂井選手が観客に両手を振りながら歩いていた。普段の坂井からは想像もつかない行動である。板ふみの技術、ナンバー①はもちろん坂井選手である。その坂井選手が普段とは違っていた。結局坂井選手には勝つことができた。優勝だ。2位には山賀選手（石川）が、なんと4点の差で猛追していた。

「あのときの試合はいい勝負だったな。」「ほんとに面白い試合だった。」とその後、酒が入ると出てくる懐かしい思い出話に花が咲いた。安田先生の通夜の際、坂井君にこのことを話したら、すごく懐かしがっていた。今度飲むときにはこの話プラス安田先生の話で盛り上がる

ることであろう。

試合を離れて

いざ、飛び込みから離れたところで先生と付き合うと、人が変わったような人物転換がなされている。しかも、すごく楽しいし愉快である。そして話が進んでくると飛び込みの話になる。そこで、いろいろな論議を醸し出す。私は、石川の泉公平氏、横山健氏たちと安田先生と話をするのがすごく楽しかった。ぜひ、いろんな人と話し合ってほしい。この人の考え、思考、理論、具体的な方法論などをこのまま埋もらせてしまってはもったいない、日本の飛び込み界にとって大きな痛手であると思ったのである。先生は実際「講演とか、するようになったら指導者としては終わりだ。」と普段から言うておられた。そんな先生を事あるごとに飲み会に誘ったり、カラオケに行ったりとにかくよく遊んだ。極めつけはサザンクロスに行ったとき「これもってきたぞ」といって、つりのさお、道具を用意して準備万端。おいおい、釣りに来たわけではないぞおー……。石川県小松といえば日本海に面した絶好の釣り場となる。血が騒ぐとはこういうことなのか。結局、知り合いになった日本人の方と一緒に早朝ボートに乗り込んでウエリントン湾でひと時の休暇を楽しんだ。釣りの話ならまだまだたくさんあるのだが……。

私と接していた時間はごくわずかであったであろう。しかし、私自身の安田憲正先生はとても大きくすばらしい人物であった。尊敬する人物であった。思うに先生の歩んできた道を私も歩んでいる。具体的にいうと「松任国際大会 兼 日本選手権」では米子での「日本選手権」であり、高等学校体育連盟の水泳常任委員飛び込み委員長の席も私が引き継いでいる。高体連の飛び込み要項の改革に関しては、ロンドンオリンピックの報告のときに先生にあって資料を見ていただいた。昨今、高等種目で世界が見失いかけている飛び込みの「美」も先生は子供たち（選手たち）に言い聞かせていると聞いた。今度は先生から教えをいただいた私たち一人ひとりが日本の飛び込み界を支えていかななくてはならない。

「……たたないで、もうこれで十分だ。おお、神よ、彼を救いたまえ……」

「……帰れるんだ、これでただの男に。帰れるんだ、これで帰れるんだ……」

合掌。